

『西遊記』形成史の研究



磯部 彰著

磯部 彰 著

〔東洋學叢書〕

『西遊記』形成史の研究

刊 行 創 文 社

磯部 彰 (いそべ・あきら)

1950年藤澤市に生まれる。1973年東京學藝大學教育學部卒業，同大大學院教育學研究科を経て東北大學大学院文學研究科修士・博士課程（中國學專攻中國文學）修了。富山大學人文學部助教授。文學博士（東北大學）。

〔編著・論文〕『中國地方劇初探』（多賀出版）など。「安南國における『西遊記』の受容」（『富山大學人文學部紀要』第5號），「大聖寺藩舊藏漢籍の研究」（同第11號），「『五天竺』の研究」（同第17號），「廣勝寺明應王殿の元代戲曲壁畫の畫題について」（『東方學』79輯）など。

〔「西遊記」形成史の研究〕

（著者との申し合せにより検印省略）

晩印刷・鈴木製本

發行所	株式會社	創	文	社	著	者	磯	部	彰	一九九三年二月二五日 一九九三年二月二八日	第一刷印刷 第一刷發行	定價九二七〇圓 （本體九〇〇圓）
本社 假事務所	112 東京都千代田區一番町一七―三 111 東京都文京區關町一四四―七 電話 〇三―三三三五四三六― 振替 東京二―九二四七二	發行所 久保井浩俊 印刷者 中内康兒										

ISBN4-423-19241-1

Printed in Japan

目次

序	『西遊記』研究小史……………	三
第一章	唐前半期における唐三藏傳説の發生とその擴散……………	四
第二章	唐後半期における四川・西北地方の唐三藏西天取經傳説……………	七
第三章	唐代の密敎文化に見える唐三藏西天取經傳説……………	一〇三
第四章	宋代における唐三藏西天取經物語の成立と江南文化……………	一二七
第五章	「元本西遊記」の形態について……………	一四五
第六章	「元本西遊記」と虞集撰「西遊記原序」——丘處機の事跡をめぐって……………	一八一
第七章	孫悟空像の形成とその發展……………	一三五
第八章	猪八戒像の形成とその發展……………	一四九
第九章	唐太宗入冥物語と陳光蕊江流和尚物語……………	一七三
第十章	『楊東來先生批評西游記』劇の成立とその刊行——明前期の戯曲西遊記物語について……………	一八一
第十一章	『迎神賽社禮節傳簿四十曲宮調』に收められる「西遊記」隊舞戲……………	一八三
第十二章	明後期における『西遊記』の大成とその流布……………	一八五

第十三章	清代における『西遊記』の戯曲化と繪畫化	四七
第十四章	清代の『西遊記』と民間藝能	四九
ま	とめ	四九
あ	とがき	五三
掲載圖版	一覽	五三
索	引	一 46

『西遊記』形成史の研究

序章 『西遊記』研究小史

一

明代における「四大奇書」の成立は、中國文學史の上で特異な色彩を放つ出来事である。

「四大奇書」の筆頭に位置する『三國志通俗演義』は、亂世のもとの將相・幕客の野心を餘すところなく描き出し、『水滸傳』は、官界の腐敗による壓政にさらされた胥吏・農民の處世術を描き出した。『金瓶梅』は『水滸傳』にその源泉を仰ぎつつ、一夫多妻の制度のもとに置かれた豪商の妻妾たちを主人公として、彼女たちの極めて人間的な感情の織りなすあやを克明に描き出した。そして、『西遊記』は、菩薩道を確立するために求法巡禮の旅に出た修行者の刻苦する姿と、その根底にある人間のありようを、破格な表層を借りて表出した。

これらの、中國文學を一方で代表し得る奇書群は、文學形式から見れば、「小説」というジャンルに統合すべきものである。かつて、このジャンルは、士大夫からは表面上「文學」とは見なされなかった。しかし、實際は、『金瓶梅』を除くいずれもが、長い歳月と讀書人を主體とする多くの人々の手を経ることによって、はじめて躍動感ある長篇小説へとまとめあげられたものである。

それゆえ、この奇書群の形成過程を追うことは、中國小説の特色、延いては、廣く中國文化のあり方を明らかに

にすることが出来るのではないかと思われる。勿論、完成された作品はそれ自體一つの「文學」作品としての價値を持つことは言うまでもないが、それと同時に、中國小説の極めて特異な形成過程を顧みれば、その形成過程と受容の歴史の研究こそがまずもって肝要なことであろうと思う。

本研究で取り上げようとする『西遊記』も、複雑かつ特異な發展を経て、今日見られるような長篇小説となつた作品の一つである。

『西遊記』は、長い歳月に亘る形成と流布の過程で、それが世人から注目される特色をいくつも兼ね備えて行つた。現存する宋代の『大唐三藏取經詩話』から明後期の世徳堂刊本『西遊記』（『新刻出像官板大字西遊記』）、清初の『西遊證道書』まで、それぞれ異なるテキストは、それぞれの特色を持つが、とりわけて大成本である世徳堂刊本に見える特色は大切なものであるように見える。それは、『西遊記』形成史の上で、世徳堂刊本こそが量・質兩面からそれを代表し得るテキストであることによる。

いま、世徳堂刊本『西遊記』を一讀して、眞先に感じられる特色は、一に作品を通して作者が讀者に訴えかける旨意とその伝え方、二に讀者にこの作品を厭くことなく讀み續けさせる文學的趣向、の二點にあると思われる。その旨意と趣向は簡單には言い盡くせないが、強いて一口でまとめれば、以下の如くなる。まず、『西遊記』の旨意は、觀音の福德を信仰する修行者が、その信仰心を頼りにもるもろの煩惱を打ち破って、悟道覺醒の彼岸へ到達することであり、その精神修養の過程を或は日常的なもの、或は具體的な事例に借りて説いたところに作品としての特徴がある、と言うことが出来るのではない。また、その文學的趣向について着目すれば、一つの小説テーマに固執せず、多様な關心をもつ讀者たちそれぞれに何らかの満足感が得られるような形で物語を構成した點に、『西遊記』の獨創的な趣向が窺え、人々はその點に「おもしろ味」を感じ取った、と言えるのではない。

いか。

二

さて、人々に夢や希望・驚嘆・おもしろさなどを與える『西遊記』ではあるが、その成立には長い年月と多くの人士の英知・創意が必要であった。この『西遊記』完成に到るまでの過程、或は、完成後の流布状況について、過去多くの検討がなされ、一定の成果を見ている。

いま、ここでその研究の足跡を辿ってみよう。

『西遊記』の研究は、中國ではその發端は清代の考證學の餘波に兆している。丁晏らが『西遊記』を淮安の吳承恩の作と考證したことを始めとして、紀昀が小説中の官制が明代のものであるからそれは明人の作だと言ったこと、洪亮吉がその記事には基づくものがあると指摘したことなど幾多の例を挙げ得るが、當初は研究と言うよりは興味本位であったと言えよう。ところが、辛亥革命前後に到って、外國小説の紹介や梁啓超らの小説效用論が唱えられ、更に「文學革命」が提唱されるようになると、中國小説への見方も大きく變化しはじめる。そのような情勢下に、蔣瑞藻が小説・戯曲の資料を個別作品ごとに收録した『小説考證』を出した。『西遊記』に限定された資料集ではなく、また缺點もあるが（『小説考證』一九八四年版「重印説明」）、一方で「小説史出現のための地ならしをし」、一方で錢靜方の『小説叢考』、魯迅の『小説舊聞鈔』、孔另境の『中國小説史料』が生まれる契機を作った。⁽¹⁾蔣瑞藻のあと、『大唐三藏取經詩話』・『新雕大唐三藏法師取經記』の影印刊行に關連して、王國維が前者の刊記に「中瓦子張家印」とあることから、『夢梁錄』卷一五（卷二三の誤り、筆者注、及び卷一九）に記述さ

れる杭州の「張官人經史子集文籍鋪」(「張官人諸史子文籍鋪」の誤り、筆者注)の刊行物と見做した(「跋」乙卯春、即ち民國四年、一九一五年)。羅振玉は「跋」文二種に兩本の簡単な書誌・所藏者等を記し、影印本を作つて廣く江湖の士に宋代の唐三藏西天取經物語を提供した(丙辰、即ち民國五年、一九一六年)。

一方、蔣瑞藻による小説資料搜集の試みは、魯迅が『中國小說史略』(一九二三・二四年)によって小説史を體系づける中で、『小説舊聞鈔』(一九二四年)という形で繼承された。前者は小説研究史上劃期的な出來事で、後の研究に多大な影響を與えた。『西遊記』の研究は、『中國小說史略』に始まつたと言つても過言ではなく、その中で、『大唐三藏取經詩話』が宋版か元版かという問題(第一篇「宋元之擬話本」、楊志和の^(下)「西遊記傳」のあとに百回本『西遊記』が出て、作者は吳承恩であるという今日なお尾を引く問題が提起される一方、清刊諸本や『後西遊記』などの續編の紹介がなされた。この頃、胡適は『西遊記』の總合的研究に着手し、やがて『西遊記考證』(『讀書雜誌』第六期、一九三一年)を發表した。胡適の考證では、『西遊記』の源泉は『大慈恩寺三藏法師傳』や『大唐西域記』にあり、それが神話化されて心經の故事のごとく虚構化され、ついには『大唐三藏取經詩話』となつて祖型が確立される、とした。その取經詩話は、三つの點——猴行者・深沙神・妖怪と災難——で注目され、後の『西遊記』と關係するような點も見られる、とする。また、猴王の出自について觸れ、周豫才が無支祁の影響があるとするが、ホルスタインが指摘した『ラーマーヤナ』のハヌマーンの影響があると見た。作者については、『小説考證』の記事から吳承恩と考え、三つのパートから成る作品には「玩世主義」が現われていると主張した。胡適はこの他、四遊記本の楊致和編本について論じた「跋四遊記本の西遊記傳」、寧夏出土の『銷釋真空寶卷』の年代やその中に記された「西遊記」故事について言及した「跋銷釋真空寶卷」などを發表して、『西遊記』研究論争の火種をおこした。胡適の各論をめぐつて、『銷釋真空寶卷』については俞平伯がその非科學的研究方法

を批判するとともに、重要な問題提起も行なった（『駁（跋）銷釋真空寶卷』、『文學』第一號、一九三三年）。俞平伯は、胡適が『銷釋真空寶卷』を初見して直ちに明末のものとする「先入観」を研究の前提とした点を批判し、更に、その先入観を傍證と杜撰な調査で證據立てする點、或は、吳承恩の小説西遊記から寶卷の記載が出たという固定的圖式を大前提に論を進める研究方法を疑問視した。そして、胡適が論據とした寶卷と小説、雜劇西遊記の比較が信頼できるものではないことを寶卷の滅法國や火龍、戲世洞などで例證するとともに、胡適が自説に不都合な點に言及しない點を鋭くつけた。その一方で、當時、『淮安府志』の記述を短絡的に小説西遊記に結びつけ、その作者を吳承恩とする通説にも疑念を呈示する。俞平伯は、世徳堂刊本に吳承恩の名は見えず「華陽洞天主人校」とのみ記されること、或は、陳元之序に「今之天潢」・「王」・「八公之徒」といった記述があることなどから、吳承恩を小説西遊記の作者とするには證據が不十分で、一説とすべきであるとし、結果的に胡適の論據のもろさを指摘した。結論として、俞平伯は、胡適説に惑わされることなく、『銷釋真空寶卷』の内容やそれが宋元刻本西夏文書と同伴であったことを考慮して、年代の再検討をすべきであることを導いた。

俞平伯の胡適批判にやや遅れて、鄭振鐸がやはり胡適などの『西遊記』研究に批判を加えつつ、新資料の導入によって作者・版本・内容をめぐる諸問題に一つの解答を與えた（『西遊記的演化』、『文學』第一卷四號、一九三三年）。鄭振鐸は北平圖書館が日本の「村口書店」から購入した二種の明板西遊記——世徳堂刊本・朱鼎臣編本——を調査するとともに、孫楷第の『中國通俗小說書目』を参照した結果、諸本中、世徳堂刊本が最も古い版本で、陳元之序に據ると華陽洞天主人とは唐光祿らしく、しかもそれは吳承恩の手に出たとはせず「出今天潢何侯王之國」とある點に關心を懷いた。その頃、やはり北平圖書館で『永樂大典』に「魏徵夢斬涇河龍」條があることが発見された。孫楷第から全文の寫しを手にした鄭振鐸は、その「西遊記」が元末のものと考え、『西遊記』の流れ

は、魯迅の言う楊致和編本、吳承恩本の順ではなく、さりとてある人（胡適）の魯迅説批判も證據不十分で取るに足りないとした。そして、魯迅の吳承恩本に先行本があるという發言は認められるが、その祖本には『永樂大典』本を置くべきだと主張し、以下のように考えた。朱鼎臣編本の出現によって、楊致和編本が省略本であることは一層明瞭となった。楊致和編本は、閩南の余象斗らの刻板で、嘉慶版四遊記本はそれを翻刻したものであった。ところが、嘉慶版は翻刻の際、余氏原刻本に石猴の誕生場面等が脱落していたのを知らず、そのまま翻刻してしまった。このような缺陷があるのを知らず、胡適は魯迅説が成り立たないのを「鐵證」を用いて證明しようとしたが、それは成り立たないと手きびしく批判した。そして、鄭振鐸は、胡適が言う楊致和によって省かれた「吳承恩本の部分」を有する舊鈔本楊致和編本を見たことがあったが、それは高く買えず、行方もわからない、と自説補強のために「證據」を加えた。⁽²⁾

鄭振鐸は『永樂大典』本、吳承恩本の位置づけを定めた後、朱鼎臣・楊致和兩編本の位置づけを試みた。まず朱鼎臣編本については、版式から見て隆慶・萬曆の産で、場合によっては世德堂刊本の前かもしれないが、吳承恩本から出ているのは確かである。しかし、卷四の陳光蕊故事は吳承恩本にはなかったもので、朱鼎臣は吳昌齡西遊記雜劇（楊東萊批評本のこと、筆者注）から取材して補入したもので、文體が吳承恩本とは全く違う。反對に、袁守誠妙算の段は吳承恩本とはほとんど同じで、『永樂大典』本とは隔たりがある、吳承恩が『永樂大典』本を擴大して新作とも言うべき『西遊記』を作ったことを想えば、當然、朱鼎臣編本は吳承恩本の省略であることが明確であろう、とした。次いで、鄭振鐸は、朱鼎臣編本が紙面の不足から卷九・一〇で急に杜撰な省略を行なったことを指摘する一方、楊致和編本は朱鼎臣の失敗を見て、朱鼎臣編本と吳承恩本とを併用して省略本を作ったと見なし、吳承恩本・朱鼎臣編本・楊致和編本という版本の年代比定を圖式入りで説明した。ところで、版本の系統

づけの上で、一番問題となるのは、陳光蕊故事の有無であるが、鄭振鐸は次のように考えた。陳光蕊故事は『永樂大典』本、或は吳承恩本にはなく、朱鼎臣が吳承恩本を省略した時、戯曲から取り出して自らの手で一卷八則の話として補入した。清初になって、汪懋漪が『西遊證道書』を編纂する時、朱鼎臣編本から陳光蕊故事を寫し入れたが、それに言う大略堂の釋厄傳とは朱鼎臣編本の異版か、明清の翻刻本であつただろう。もともと、この故事は『西遊記』にあつたのであり、吳承恩本の第九三回などにはその存在を示す痕跡を留めている。しかし、世德堂刊本では、真相はわからないが脱落した、と。物語の構成に關しては、胡適の區分を受けて三つの本來獨立した要素から成るとし、もし吳承恩本に陳光蕊故事があれば「單元」は四になると言う。そして、第一の孫悟空「單元」では孫悟空出自問題に言及して、猴行者の身分にはハヌマーンと似たところがあり、孫悟空の出自はハヌマーンの化身と見做せるとした。第二の唐太宗「單元」では、唐太宗入冥譚が『永樂大典』本で『西遊記』に取り込まれたこと、魏文帝入冥譚を扱った「冥司語錄」が内閣大庫にあつたことを指摘する。第三の西遊「單元」では、『大唐三藏取經詩話』と吳承恩本との間に差異が大きいこと、「吳昌齡雜劇西遊記」は吳承恩本に近いが戲臺の制限から故事も少なく、取經詩話に見える變化多端もなかった、とその性格を分析する。と同時に、劇に見える陳光蕊故事は『齊東野語』の記述に基づくのではないかと指摘した。

鄭振鐸の立論を考える時、孫楷第の研究を忘れるわけにはいかない。孫楷第は白話小説・戯曲など多方面に互の研究の一環として、小説の版本整理を行なつた。『日本東京所見(中國)小説書目提要・大連圖書館所見小説書目提要』(一九三二年)、『中國通俗小説書目』(一九三三年)はその輝かしい成果であるが、『西遊記』研究の上でもその小説版本のほぼ全貌が明らかにされた點で大きな意味を持った。一方、戯曲の西遊記劇についても精緻な研究を行ない、日本で發見された『楊東來先生批評西游記』が明初の楊景賢の作品であると認定した(「吳昌齡與雜

劇『西遊記』、『輔仁學誌』第八卷一期、一九三九年）。孫楷第は傳奇四十種本の西遊記雜劇が吳昌齡撰とする點に疑念を懷き、天一閣藍格寫本『正續錄鬼簿』の記載から『萬壑清音』卷四の西遊記四折のうち、二折——「回回迎僧」・「諸侯餞別」——が元の吳昌齡劇の殘折であり、残り二折は「楊東來先生批評西遊記」のものとして、そして、『楊東來先生批評西遊記』は、明清の人が吳昌齡の作と錯覺したが、實は『錄鬼簿續編』に據れば楊景賢の作に「西遊記」があり、しかも徐乾學傳是樓舊藏の抄本詞譜に楊景夏の玄奘取經第四出が引かれていて、それは楊東來批評本と同じゆえに、楊景賢の作品に歸すべきだと結論づけた。孫楷第の分析は、資料の裏打ちのもとに立論されていて、今日なお説得力がある。

三

中國における『西遊記』研究もさることながら、それらの研究に多大な影響を與えたのは、他ならぬ日本である。日本に『西遊記』などの唐三藏西天取經物語が將來されたのは、かなり古い時代に溯るが、それが今日の關心で捉えられるようになったのは、江戸時代も後期になってからであろう。管見の限り、この時期、二人の文人の發言に注目すべきであろう。一人は瀧澤馬琴、いま一人は岳亭丘山（八島斧吉）である。

瀧澤馬琴は『西遊記』の讀者という枠に止まらず、明刊本と清刊本との相違——陳光蕊江流和尚物語の有無など——や清刊本の悟一子の批評が持つ性格——悟道の覺醒を喚起——といった點にまで視界を擴げていた。彼の『西遊記』諸本に懷いた眼識の鋭さは、周知のごとく文化三年（一八〇六年）に刊行された『畫本西遊全傳』に序文を求められた際、明刊本の「秣陵陳元之・刊西遊記序」を取り上げ、清刊本にある元・虞集序や清・尤侗序

等を採用しなかつた點に端的に現われている。

一方、岳亭丘山は、孫悟空像の出自について觸れる點（『通俗西遊記』五編「附言」）で注目に値する。

予が祖父曾テ崑陽在勤タリシ時、華人ニ聞ル事アリ、唐土黃淮合流ノ所ニ淮水ノ神ト云者アリ、無支祈ト號ク、形猿ノ若クニシテ、高キ額長キ鼻青キ身白キ首眼ノ光電火ノ如シ、……（中略、筆者、以下同じ）……此西遊記ノ孫悟空ハ此無支祈ヲ種トシテ三藏ノ西域記ニ持コミテ作シ者也。

丘山は、祖父が経験した華人よりの聞き語りを参考に、孫悟空は無支祈をモデルとし、小説『西遊記』はそれを玄奘三藏の見聞記である『大唐西域記』で包み込んだもの、と見做した。後で中國の魯迅らが、孫悟空の無支祈出自説を提示しているが、それに先立つこと、約百年である。

しかし、馬琴や丘山は、當時としては異例の人物であつて、それ以後しばらくは、格別に『西遊記』に關心を拂う人物は出てこなかつた。

明治に入ると、『西遊記』の名が徐々に浸透しつつあつたためか、再び『西遊記』に眼が向けられるようになった。棘樹散人赤松光映は、江戸末期に『西遊記』を読み、五十餘年後の明治二年、再度讀み返したところ、大いに感ずる所があつたので、その部分を筆記して『西遊記骨目』と名づけ、上梓している。全三五條のうち、關係深い言及を簡便にまとめれば、次のようなことにならう。

『西遊記』の意圖は唯識玄妙を得るところにあるらしく、慈恩大師の門下に連なる者の手になるらしい。主人公の玄奘三藏と孫悟空は、大般若經の精神に則つた存在であるのに對し、登場する妖怪群は、現實に存在する六賊を象徵するもので、「妖怪」が登場することで書物の價值を貶しめるのは適切ではない。『西遊記』は『三國志演義』と趣向が似ている箇所が見えるが、前者は「般若」の思想に、後者は「儒道」の思想にそれぞれ基づいて

構成されている。『西遊記』に見える「烏巢禪師」や寇員外の話は、「原作」に後人が手を加えたらしく筆力が弱い、など。

赤松光映は、天臺座主となって延暦寺にも居たので、或は天海舊藏『唐僧西遊記』などを手に取って讀んでいたのかも知れない。

明治三八年（一九〇五年）、當時のジャーナリスト徳富猪一郎（蘇峰）は、村幸書店の店頭で『新雕大唐三藏法師取經記』を發見して購入し、宋版との斷を下した。のち、羅振玉が借用して『吉石齋叢書』に收め、本書の存在が世に知られるようになった。徳富蘇峰は、三浦將軍藏の『大唐三藏取經詩話』と對校し、かつ「高山寺書目」にも當たつて本書の書誌的解説を試みた（『大唐三藏取經記』、『典籍清話』一九三二年。「玄奘三藏の上表記に就て」、『愛書五十年』一九三三年。「大唐三藏取經記」掘出しの記、『讀書九十年』一九五二年）。蘇峰の發言とともに、この時期、注目すべき見解を呈示した南方熊楠も忘れるわけにはいかない。

南方熊楠の脳裡には『西遊記』が置かれていたらしく、十二支の動物をめぐる研究で猴を扱う中、『西遊記』の孫悟空が『ラーマーヤナ』の「ハヌマン傳から轉出」したと推察した。それが單なる偶然の類似という形で指摘されるのではなく、『ラーマーヤナ』故事の研究、或はその中國・日本での受容情況などを踏まえての發言であった（『猴に關する民俗と傳説』、『太陽』二六卷一・二・五・一三・一四、一九二〇年。「古き和漢書に見えたるラーマ王物語」、『考古學雜誌』四卷一二號、一九一四年）

大正末になると、『大唐三藏取經詩話』と並ぶ發見、『傳奇四十種』本の『楊東來先生批評西遊記』の發見があり、内外に反響を呼んだ。『楊東來先生批評西遊記』に逸早く着目し、書誌的紹介をしたのが長澤規矩也（『傳奇四十種と小説三十種』、『斯文』第八編第七號、一九二六年、など）であり、本書を排印に付して江湖に紹介したのが鹽谷